



北高夢ロード通信

第 10 号 (2022.3)

チャレンジ目標？

会長 波多野宏之

この号がお手元に届くころには、新年度の下関北高校入学者数も確定していることと思われませんが、2月下旬に新聞報道された山口県立高校の第1次募集登録者数で見ますと、わが下関北高校は倍率0.2倍で県内最下位でした。(同率で低いのは、周防大島高校地域創生科。)より詳しく見ますと、募集定員80名のうち推薦入学合格内定が19名、第1次募集定員61名、志願者数15名で倍率0.2ということ。昨年(2021年)度の倍率は0.5です。参考までに手元の新聞切り抜きで2019年度を見ると、募集定員105名、推薦入学合格内定29名、登録者数30名で登録倍率0.4。18年度登録倍率0.6とあります。2018年度は下関北高として募集した最初の年であり、この5年間に定員が105名から80名に縮小されたにもかかわらず、倍率は0.6から0.2に減少したことになります。

毎年、第2次募集の生徒が入ってはきますが、最終的な定員割れ状態はより顕著になってきており、このまま推移すると、せっかく新たな統合高として生まれた下関北高校の存続自体さえ危ぶまれます。高校の特色・魅力を改変してアピールすべく打つ手を考えるのが喫緊の課題です。残念なことに、学校と地域団体代表等との既存の協議体で学校は「中学生の数が減って・・・」と述べて、打開策を探ろうとする積極姿勢が見えないのは実に不可解極です。

そのように高校自体がチャレンジングでないと思われてならないのですが、実は、下関北高の年間教育計画の中には、重点目標とともに、「チャレンジ目標」なるものがあり、2021年度は「品行方正」、2022年度は「日進月歩」となるようです。いきさつを聞くと、これは生徒会が定めたもので、学校はそれを追認している。いろいろ聞いてみると、「品行方正」——、かつては言うまでもなく北高生「品行方正」が「定説」でしたが、近年、乱れてきており(会報8号 p.1 参照)、あえてこの標語を選んだ、ということらしい。「日進月歩」も悪くはないですが、もう少し覇気あるものを考え付かないものか。ちなみに、下関西高のそれをネットで調べてみると、「・・・家庭学習・・・『学年の数+2時間』」とあります。勉強のこと、しかも数値目標を掲げればいいというものでもありませんが、それなりに気概を感じるではありませんか。

ひるがえってわが夢ロード。2013年の結成以来10年近く、それこそ、生徒の言葉を借りれば「品行方正」「日進月歩」の思いで、高校、ひいては地域の皆様と接してきましたが、この先、他人事ならず、よりチャレンジングな活動を展開しなければならないように思うこの頃です。財政問題(p.5 参照)、役員若返り、より効果的な地域貢献、北高との向きあい方についても、よりよく刺激しあう関係を構築したいと思っています。P.8に記しましたようにこの4月、2022年度年次総会の際にも議論しましょう。

〈ギャラリー夢ロード〉 第12回展 進化する しかけ絵本

11月2(火)～28日(日)、当初計画では通常の2週間でしたが、準備に費やした労力を考慮し、4週間に延長して諸行事とも無事開催できました。

東京在住会員有志の物心両面にわたる協力のもと、展示資料の収集、広報のための写真撮影、チラシ、ポスターのデザイン等にも格段の注意を注いで、海外の出版物を中心とした「しかけ絵本」展が実現。諸行事を含め、来場者は183名でした。

絵本の展示とあって、公民館や学校などで絵本を使って保育や教育をされる方、書店関係者、絵本愛好家など、従来と異なる客層の方が多く、来場者の紹介による新たな来場者も多数ありました。

巡回展の試みは、一部の展示物を除き、梅光学院大学図書館で実現し(12月1日～1月31日)、しかけ絵本づくりワークショップも実施されて、多くの学生が参加し喜ばれました。

とりわけフランスの若い作家の手になる作品は、アート作品としての鑑賞に堪えうるものであり、大きなインパクトを与えました。約70点の全作品の写真と書誌データを掲載した小冊子も作成され(発行: HIM 企画 A5版 全カラー 35頁)、発行者のご厚意により、来場者に無料で配布できたことも、活動の成果として特筆されます。(波多野宏之)



レベッカ・ドートルメール著『正午に船橋で』2019

〈ギャラリー夢ロード〉 第12回展

かえるの しかけ絵本

紙を半分に折った所を中心にして、かえるの体の縦半分を線で書いて、はさみで切り取りました。かえるの手足の部分は、小さかったので切るのがむずかしかったです。

口の大きさが、金魚は少し小さいし、かえるは大きすぎたので作りかえようかと思ったけど、時間がなかったのであきらめました。

金魚は形が小さくてしっぽを切る時、頭まで切れました。二つ目の金魚はうまく切れたので、作り直さずそのままにしました。両方はりつけました。

池の中やまわりがさびしいので、草を作ったり金魚を増やしたりしようと思いました。

かえるの頭は体より大きくて、変な感じがしました。でも、高い所に置いてみると、とてもはっきり見えてかわいいです。

出来上がった時は、ほっとしました。

山崎菜々子 (小学5年生)



(右端が筆者)

ワークショップ傍観者

展覧会場で「しかけ絵本を作ろう！」のワークショップがあり、孫の返事、「う～ん」を何とか説き伏せて参加。日頃から何やかや物作りをよくしているので、私が傍観者でいても困ることなし。参加できたことに感謝です。※正に立体造形の展示作品を見て、驚きの『ウ～ン』ばかりです。有難うございました。

山崎陽子 (祖母)

〈ギャラリー・トーク〉

わくわく！しかけ絵本

“しかけ”という言葉は、人にわくわく感を生じさせる。「しかけ絵本展」開催のギャラリーに入る。室内をぐるっと見渡すと、壁面、棚、机にずらっと並べられている様々な形の本達。どの本も殆んど初めて出会うものばかりで、わくわくしてくる。

一角に懐かしい本を見つけた。アメリカの作家ロバート・サブダの『不思議の国のアリス』だ。以前、TV番組「世界ウルルン滞在記」で、若い俳優がサブダの元でしかけ絵本の制作を体験するというものだった。ページを開くとその場面の絵がバツと立ち上がる。数十枚のランプがパラパラと宙を舞い、アリスもうさぎも立ち上がって見上げている。びっくりして画面に釘づけになった。(のちに購入し、孫の誕生日プレゼントにした。)

どのコーナーもそれぞれおもしろかったのだが、印象的だったのは、壁に飾ってあったモノクロの切り絵の本『モーションシルエット』。見開きのページに黒の切り絵が立ち上がり、光を当てると影が生まれ、光源を動かすと汽車とレールが動き、この物語の幻想的な世界が広がる。

そして更に驚いた本は、『正午に船橋で』という作品。フランスの作家の手になるこの本は、主人公のうさぎが恋人から、旅立つので港の船橋で待つとの知らせをうけ、広い庭園を抜け、街を歩いてやっと辿り着き、見送りを果たすというもの。緻密きわまる100枚(!)もの切り絵。庭の植栽の中を門へと進み街の建物を次々と進んで行く。街の高台から港の船へと、ページをめくる毎にだんだんと近づいていく。その

描写の細かさにため息がでる。

伊藤祐里子さんのギャラリー・トーク(写真上)では、しかけ絵本の始まり、その後の流れ、種類、それぞれのしかけの詳細説明、ポンピドー芸術文化センターについて等、知らない世界の話ばかりで、とても興味深かった。

そして江原千花さんの朗読と舞踊、音楽(アフリカの楽器カリンバなど)とを組み合わせたパフォーマンス(写真下)に静かな音色が寄り添った美しい物語を堪能した。

「本は、たった一枚のページをめくる向こう側に未知の世界、ドキドキの未来が無限に広がっている」と、ある出版社の編集者が書いていた。今回の「しかけ絵本」でまさにそのことを実感し、大いに楽しむことができた。今回展示されていた本達にも子ども達がいつか巡り会う機会があるといいなと思う。

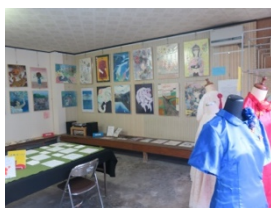
(森田実榮子)



〈ギャラリー夢ロード〉第13回展

北高成果展2022

2月15日(火)～27日(日)の日程で「北高成果展2022」が開催されました。今回の展示は、下関北高校開校2年目に開催した「北高成果展2019」に続くもので、すべて下関北高生として入学



した生徒の作品展示となりました。総合文化部長生徒による水彩画や油絵、学校独自の「地域探究」の授業で作成した点字詩集、絵本、乳幼児用品、玩具等約130点が展示されました。ピクチャーレールへの吊り下げ金具の設置など一部補助しましたが、作品の搬入と展示作業は全て生徒自身の手によって行われました。施設の特徴を生かしたディスプレイなど、作業の手際よさに、さすが高校生だと感心しながら眺めていました。保護者など限られた者を除いて、高校生の学習の成果を目にすることはほとんどありません。そうしたなかで、普段着の高校生の姿を垣間見ることができるこの成果展は非常に意義深いものと思います。同じく地域と共にある学校～コミュニティ・スクール～を推進している豊北小・中学校との連携も深まっており、中学校では高校生の作品を展示する取り組みが行われています。作品を通して、高校生が中学生の、中学生が小学生のあこがれの対象、将来目指すべき良きモデルになることを期待しています。少しでも多くの方に観ていただきたいとの思いで、ギャラリーでの展示終了後、豊北生涯学習センターにて巡回展示しました。

(文責 白岡)

第14回展 **美術作品を借りよう!

これが「アルトテーク」だ。第2回**

3月8日(火)～20日(日)開催。

2020年1～2月に開催した第1回に続くもので、約100点を展示します。

アート作品のコレクションをその場で鑑賞するだけでなく、好みの作品を自宅、学校のクラス、勤務先の事務所などに持ち帰って飾り、作品と直に接して楽しんでいただく。——こうしたサービスは日本ではほとんど行われていませんが、ヨーロッパでは公共図書館などの文化施設にギャラリーを併設し、「アルトテーク」や「グラフィテーク」と称して活動を展開し、市民に親しまれています。

「アルトテーク」(フランス語 *artothèque*, ドイツ語 *Artothek*)の「arto」はアート、「thèque」「-thek」は、コレクションを置くところ(棚とか館)を意味します。同様に「グラフィテーク」(フランス語 *graphothèque*, ドイツ語 *Graphothek*)の「grapho」「Grapho」は、描くこと・図表・印刷物・版画を意味しますから、版画など図像資料を置いた場所ということになります。版画、写真、ポスターなどいわゆる複製美術のオリジナル作品の貸出が一般に行われ、フランスでは「アルトテーク」、ドイツでは「グラフィテーク」と呼ばれることが多いようです。

こうした活動には本来、二つの大きな目的があり、それはアート作品一般、特に地域の若手作家の作品を自治体等が買い上げることによる創作支援とオリジナル作品を身近に置いて親んでもらう、ということです。

今回の夢ロードによる展示と貸出を通じて、「アルトテーク」の意義をさらに広く知っていただければ幸いです。(文責 波多野)

〈2021年度事業報告(自然観察部)〉

＊ ＊ 北高地域探究授業支援 ＊ ＊

昨年6月から北高からの依頼を受け、岡崎、藤岡の2名が補助指導者として、年間21回に及ぶ地域探究授業を担当した。

その役割を詳しく説明すると、生徒が五感を通して地域の自然や人との関わりのなかで、自分の知識、技能などの「知」を獲得していく支援を行なうことである。

これまでの経緯から「自然観察を通じて感じたものを、自分の言葉で楽しく人に伝える技能を身につけよう」と方針を決め「まちづくり財団」から補助金を受け、計画を実行した。

(実施した事業内容)

- ①話し方教室、手話による自己表現教室
- ②田んぼや河川の生き物、きのこ等菌類探究
- ③角島灯台ガイドボランティア体験
- ④豊北町の自然公園
(岳山・牧崎・平野・油谷)
の探索
- ⑤山口県地籍図の有効な使い方教室
- ⑥豊北の土で、陶器などの物作り体験



↑土を細かく砕いて粘土を作る

「知」の獲得のうち、文字や数値で受容される「形式知」が学校の授業だとすると、われわれの支援は「体験知」の醸成である。このような学びが授業として成立するためには、単に自然と関わるだけではなく、生徒が対象の問題点を整理し、解決策を想定しながら学ぶこと(=探究心)が必要となるが、これがなかなか難しい。「ただ楽しい」というだけで、探究という行動につながって来ないのだ。

探究心とは「なぜ…」と考えることである。例えば、「なぜ青のりは採れなくなったのか」と

疑問を持ち、それをずっと解明していくことである。生き物探しは確かに楽しい。しかし、われわれは、そのなかの何かに着目し探究する「心」を育てたいのである。

これまでの試みは、ことごとく失敗した。積極的に何かを教えようとする、しらけて面白くない授業に陥るディレンマを抱えた。

そこで開き直り、今年は、とにかく教えようとせずに、この場所でしか体験できない機会をつくり、体験知によって生徒の「心の根っこを育てる」と決めて実行し続けた。

ボランティア体験で成長の片鱗も

事業なかには成果も見られる。紹介しよう。



↑「解説に感動しました」という感想がこの老夫婦から聞けた。

灯台ガイドボランティア体験でのできごとである。赤の他人(来観者)に、短時間で楽しくガイドすることは、経験者でも難しい。しかし、黙って見ていると「いい天気ですね」と自然に声をかけ、上手に解説につなげている。接遇を教えた訳ではない。できるじゃないか。成長の片鱗に私たちはほくそ笑んだ。

結びとして

今後も生徒の成長を確認しつつ、体験知を「なぜ」という探究心につなげる工夫が、われわれ指導者に必要だろう。迷走していかなければならないと覚悟しているのだが…。

(文責 藤岡)

〈地域探究授業サポート〉

＊ ＊ 財務の課題 ＊ ＊

いつもご理解をいただきありがとうございます。さて、当実行委員会のユニークな事業として、毎年、美術関係の展示や下関北高の地域探究授業支援を行っております。しかし、今、財政的な悩み抱えています。

地域探求に限って説明しますと、北高地域探究授業（自然環境）サポートは、二年に一度、県や市から補助金を受けて実施しています。

○2017年度（助成金ナシ）

○2018年度（助成金アリ）

①富士ファンド：全額助成 50 万円

②山口県人づくり財団：全額助成 15 万円

○2019年度（助成金ナシ）

○2021年度（助成金アリ）

山口県人づくり財団：全額助成 15 万円

2022年度については自然・環境保護と青少年育成を結び付けた助成に応募する予定です。補助率 全額 三分の二、三分の一と助成団体により違いますが、補助率が高くなるほど助成金が付くハードルは高くなります。

財務の課題へのアプローチ

2021年度事業報告（広報P00）のとおり、他の高校ではできないような多彩な活動を実施し、人気もありますが、助成金があればその内容といっても過言ではありません。

今後も安定した事業を続けるためには、広く会員、市民の方々への授業サポートの報告等を行いながら、多くの方々に、新たに本会会員になっていただけて財務の面からも助けていただくよう訴えてゆくことであろうと考えています。

（文責 岡崎）

〈ほうほく・・・本ある場所①〉

＊ ＊ 「たまや」の子ども図書館 ＊ ＊

角島にある焼き立てのパン屋さん「たまや」は、奥さんが早朝からパンを焼き、ご主人はパンの販売と飲み物の提供をするイートイン。広瀬さん夫妻が営んでいます。健康に気遣い、添加物なしで国内産小麦を使用。

ログハウス造りの店の庭の一角に、子ども図書館があり、ブランコ、ツリーハウスなどこどもの遊び場もあります。営業時間は水・木・金の午前10時から午後5時ころまで。

建物は、2016年11月に奥さんのお父さんが手作りされました。蔵書は主に絵本で800冊以上あり、お宅にあったものを中心に、お客さんからの寄贈本もあります。店の営業時間に合わせて開いていますが、パンが完売した時には早めに閉まることもあります。

昨年、角島小学校が豊北小学校に統合され、子供たちが皆スクールバス通学になっています。学校が終わってから遊びに来ていた子供たちが減っているとのこと。隣にある公民館や旧角島小学校の教室を使い、夢ロードのギャラリー展示を巡回するなど協力関係ができればよいと思う。

（文責 古田雅士）



〈会員だより〉

＊ ＊北高の思い出と

今後への期待＊ ＊

北高へ赴任した当初の強烈な思い出がある。今から18年前、転任後初めての入学式のときである。式の最後に、在校生による校歌紹介があった。いきなり、式場が割れんばかりの大声であった。色々な学校を経験したが、魂が揺さぶられるような、こんなすごい校歌に出会ったのは初めてであった。その時、「ああ素晴らしい高校に赴任したな」と思ったものである。

それから2年間、生徒の問題行動に対する処分(停学等)が一度もなかったのも誇りに思う。文武両道を地で行くような高校であった。部活は、吹奏楽部(金賞常連)、文芸部、新聞部、陸上部(駅伝が県大会2位)、サッカー部、野球部、テニス部、バレー部など。進学も国公立4年制大学に多数合格し、私立大学でもよく健闘していた。つくづく、素晴らしい生徒たちに恵まれて幸せと思った。

次に、北高に関して驚いたことは、田舎の小規模校(済みません!)にも関わらず、山口県内はもとより、全国各地で活躍されるOBの何と多いことか。在任中に北高60周年記念行事を挙行了した(平成17年)。OBの一人で九州大学教授として活躍しておられる方がおられた。あるとき、その方に、失礼とは思ったが、「北高のような田舎の小さな高校からどうして先生のような立派な方が出られたのでしょうか?」と、ふだんから思っていることを尋ねた。すると、その方が「田舎の小さな学校だからこそできたのです。怖れを知らない、少し勉強すれば先生からも褒められるし、皆から尊敬される。すると人間はいい気になってどんどん成長するのです。」と語られた。教育の本質をずばりと言い当てられており、私も大いに共感したものである。



西嶋氏と筆者(北高玄関前、H17年)

記念行事の繋がりで、今でも親しくしている方に、高名な版画家の西嶋勝之さんがおられる。60周年記念事業の一環として『西嶋勝之版画展』を企画し、西嶋さんの作品を、北高同窓会、OB有志、私等で、合計約40点ほど買い求め、町の公民館で展覧会を開いた。3日間で、700人くらいの見学者が来られ、展覧会は大成功であった。これを機に西嶋さんとは親しくなり、自作の版画入りの年賀状を毎年頂き、貴重なコレクションにしている。また、その折、購入した西嶋さんの作品を、季節ごとに取り替えて拙宅の玄関の間に飾っている。

田舎の小規模校が教育の面で立派な成果を上げているのは、たぶん、北高を取り巻く恵まれた自然環境、OBの方の学校に対する深い愛情、そして地域の教育力によるものであろう。近年、OBの方々が「北高夢ロード」なる素晴らしい組織をつくれ、愛する北高生のために、教育環境を整えておられるのを知り、波多野会長からのお誘いに迷わず会員に加わらせていただいた。山椒は小粒でもピリリと辛い。美しい響灘の海と山に囲まれて、小規模の良さを生かしながら益々発展していただきたい。私はOBではないが、北高発展のためなら、微力を尽くそうと日頃から思っている。

(元職員 宗清禮吉)

2022年度 夢ロード総会開催のご案内

北高夢ロード実行委員会総会は、2020、2021年度とも、コロナ下にあって対面での実施を断念し、書面で行いました。今回は、引き続きコロナ下にはありますが、状況は改善の兆しを見せており、直接会員の皆様のご意見を聞くためにも、従来の対面型で下記のとおり開催いたします。総会后には、2023年に創立10周年を控え今後の10年を睨んだ、会の財政問題、役員若返り、下関北高校入学生増加への方策などについて話し合う機会を設けます。コロナ対策を講じながら進めたいと思いますので、同封の出欠はがきでご返信の上、ご参加のほど宜しくお願いいたします。

----- 記 -----

日時:2022年4月23日(土)

会場:滝部公民館(太陽館)

14:00~15:00 総会

15:00~16:00 討議—今後10年のために

問題提起:永富輝久(本会監事)

市民活動センター登録団体紹介展示

しものせき市民活動センターの登録団体活動紹介パネル展が2021年10月1日~7日、シーモール下関で開催され、本会も参加しました。

北高へふるさと納税で応援を

【ふるさと納税】システムを利用、下関北高の教育活動充実に支援しましょう。詳細は県外在住会員宛今号同封の『山口県ふるさと納税の募集』の《払い込み取扱票》通信欄に下関北高校宛を記入、振込手続後、確定申告又は特例申請で税控除されます。

<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a10700/furusato/top.html>

問合せ先:北高夢ロード実行委員会 城石郁裕

E-mail : japolo1329ik@gmail.com

笹尾信子さんご逝去

本会創設以来、笹尾商店店舗の一角を<アートの本棚>としてご提供いただき、活動拠点としての役割を担っていただいておりますが、2021年11月14日、逝去されました。享年95歳でした。生前いただきました物心両面にわたるご支援に感謝するとともに、謹んでご冥福をお祈りいたします

なお、<アートの本棚>の活動は同じ場所で引き続き運営し、標記は今後<アートの本棚>(旧笹尾商店)といたします。

短信

■阿川出身で、本会会員の荻衛さんが昨年12月、滝部駅前中通りに「ゲストハウス 時習館」の看板を掲げ、目下オープンに向け準備中です。

お問い合わせは、荻衛さん 090-1680-1623

■会報第8号(2021.3)で紹介しました重中美術館(栗野駅前)——。開設に当たられた重中十士明さんが昨年10月26日に逝去され、美術館は残念ながら短期で閉館となりました。

会費納入のお願い

2021年度会費を未納の方は、同封の振替用紙でお振り込み願います。正会員:2,000円

郵便振替 口座記号:01350-1 口座番号:106942

加入者名:北高夢ロード実行委員会

北高夢ロード通信 第10号(年2回刊)

2022年3月20日発行

編集:会報編集委員会(城石・古田・村上・戸田)

発行:北高夢ロード実行委員会

〒759-5511 山口県下関市豊北町滝部 218-5

Tel:083-782-0084

ホームページ: <http://yumeroad.org>

Email: kitakoyumeroad@gmail.com